「日々の理科」(第 1055 号)　2017 (H29),-5,27

「クロアゲハ幼虫騒動（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

大きくてゴージャスな雰囲気の「クロアゲハ」の幼虫は、子どもたちに絶大な人気だった。しかしある日、その幼虫が忽然と消えてしまった。虫好きの子どもたちは、登校するとすぐに「アゲハ園」を見に来るのだが、やはりすぐに消えていることに気づいた。

「先生、クロ（幼虫のあだ名）いないよ！逃げた！」蛹化（ようか）する直前の幼虫は、囲いが悪いと適切な場所を求めて、よく脱走する。私の教室での飼育方法は、まさしく囲いが悪い・・・というより完全解放飼育なので、終齢幼虫は逃げ出したのは当然のことだった。すぐに大捜索が始まった。こういう場合、大人が探すよりも、すぐに見つかるものである。

ほどなく「センセーーイ！いた！窓の下にいた！」と声があがった。ちょうどベランダでオクラの栽培を始めたところだったので、その出入口で発見されたのだ。さっそく大勢の子どもが取り囲んでいた。

子どもたちは、幼虫を囲んで、あーだこーだ、さっそく「クロアゲハ・サークル対話」を始めた。こうした「自発的対話」はとても大切だと思う。

「あ、もう、サナギになってるよ。」

「ホントだ！サナギだ！」

「頭らへんを、糸っぽいので吊ってる。」

「でもこのサナギ、何かサナギっぽくないなー。」

「クロアゲハのサナギだから、ちがうんだよ。」

私も近づいて見ることにした、どうやら謎のサナギは「前蛹（ぜんよう）」と呼ばれる状態のようだ。